

愛された「シユクル」の記憶

本に思い出との抱えた犬病

港北区の佐藤さんら10年かけ出版



「天使になったシユクちゃん」を刊行した佐藤泰香さん(左)、皆子さん(中)、ヒロコ・ムトーさん(右)=港北区で

十年ほど前、生まれつき心臓に病気を抱えながらも飼い主に愛され、家族の結婚式の「証人」まで務めた犬が、横浜市港北区にいた。名前はフランス語で砂糖を意味する「シユクル」。飼い主はしばらく思い出を封印してきたが、作家の友人らの協力を得て、その生涯を一冊の本にまとめ、出版した。(志村彰太)

飼い主は佐藤皆子さん(左)。一九九七年、近所のフリーターの元バリヤーが一匹だけ売れ残っていた。生後半年で、ふんにまみれていたが、「かわいそうというより、ひと目でかわいいと思った」と佐藤さん。

獣医師は「長生きはできないだろ」と指摘。食欲はなく、「一いつづつ餌を口を持っていかないと食べなかつた」。当時、二人の息子が海外留学などで家を出ていたため、佐藤さんはわが子のようにかわいがっていた。どこに行くにも、脇に抱えてシユクルを連れ出していたという。

二〇〇三年になるとシユクルの体調が悪化。すぐに息切れするよ

うになり、薬が欠かせなくなつた。そんな中、留学から帰国し、結婚を控えていた次男の匠さん(中)が「結婚式の証人になって」とシユクルに声をかけた。妻の泰香さん(右)は「悔いなく生きてほしかった」と振り返る。

式当日、五十人の出席者が見守る中で、シユクルは新郎新婦が署名した結婚の誓いの横に、「証人」として足形を押しした。家族は「証人」としてシユクルが少しでも長く夫婦を見守ってくれるよう願ったが、式の三月月後に七歳半で息を引き取った。

佐藤さんの友人の作家ヒロコ・ムトーさん(右)は「港北区、本名・相沢絃子」は、この話を聞いて「シユクルの目線」で原稿を執筆。イラストレーターでもある泰香さんが挿絵を手掛け、完成まで十年かかった。

ムトーさんは、昨年、栃木県の河川敷などで小型犬の死骸が放置された事件を挙げ、「病気があつても命を大切にする佐藤さんの姿勢に感動した」と話す。「飼つたら最後まで責任を持つ」という「当たり前のごとく」をあらためて訴えたいという。

本の題名は「天使になったシユクちゃん」(A4変型判、九十六

ページ)。税抜き千二百八十円。

家族の結婚式「証人」務め